

卒業生の9割以上が医学部に合格！ 医科大学附属高校の圧倒的な強み

全寮制で、1学年の定員35名の少人数体制のもと、卒業生の9割以上が医学部合格を果たしている川崎医科大学附属高等学校。単に高い学力を培うだけでなく、附属校の強みを生かして、大学と連携して、医師をめざすモチベーションを高める教育が充実している。具体的な教育の特色を、新井和夫校長に伺った。

全寮制の環境で豊かな人間性が育まれる

「川崎医科大学附属高等学校」は、1970年（昭和45年）、川崎医科大学開学と同時に誕生した。全国で唯一の医科大学附属高校である。開校の目的を、新井和夫校長は次のように語る。

学習環境はもちろん、生徒の日常を支える生活環境も充実している
上：校舎外観
左下：食堂
右下：女子寮外観（男女共に個室）

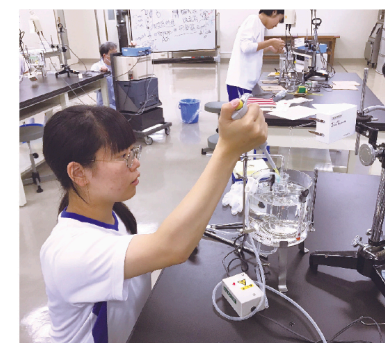


「創設者・川崎祐宣がめざしたのは、高校から大学までの9年間一貫教育を通して、良医を育てることでした。受験勉強に縛られず、豊かな人間性や体力も涵養する、バランスのとれた教育を実現しています。人間性を育む上で、多大な役割を果たしているのが全寮制だ。生徒は全国各地から集まっており（現在、70人のうち68人が県外出身者）、それまで異なる環境で過ごしてきただけに、ときにはぶつかることもある。それを克服するために、「コミュニケーションを図り、他者との距離感のとり方を身につけ、良好な人間関係を築いていく経験は、医師になってからも必ず役立つはずだ。医学部合格という共通の志を持つ者同士、常に切磋琢磨できる環境で学べることも大きな意義がある。」

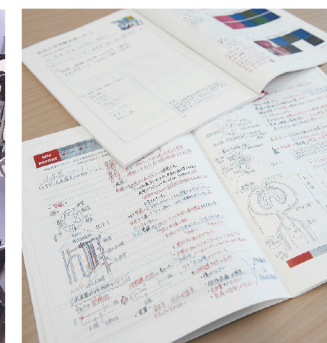
大学との連携で展開される「ドクターロード」

川崎医科大学と連携した教育プログラムも豊富だ。とくに、1・2年次の総合的な探究の時間で展開される「ドクターロード」では、多彩な取り組みが見られる。

「この授業の最大の目的は、医師をめざすモチベーションを高めることです。また、医学部や医療現場の実態に触れることで、自分の将来像をイメージさせるキャリア教育の意味合いもあります」（新井校長）。
いくつか具体例を紹介しよう。「MM見学」は、川崎医科大学の現代医学教育博物館（MM）の見学を通して、医学への関心を高める。「医師へのインタビュー」は、川崎医科大学附属病院の医師に1対1でインタビューする。「メディカルスクール・アワー」は、大学教員が、大学で学ぶ内容をアレンジして講義する。最先端の医療現場を知る「附属病院見学」、研究活動の一端に触れる「医科大学体験実習」、関連法人の社会福祉施設を訪問する「旭川荘研修」もある。卒業生の体験談を聞く「卒



医科大学体験実習



MMレポート



校長 新井 和夫 先生



旭川荘研修



MM見学



テーマスタディ発表会



医師へのインタビュー

「一般的な普通科進学校は、2年次から文系、理系のコースを選択します。それに対して、本校は全員が医学部志望者なので、入学直後から理系に特化したカリキュラムを編成しています。国語、地歴・公民の単位数は少なめで、その分、数学、理科、英語の単位数を多く設定しています。特に理科は物理、化学、生物の3科目を必修にしています。いずれも医学部に入学してから必要な科目だからです」（新井校長）。

また、平日は週3日、放課後の1時間、土曜日は午後2時間、補習も実施される。さらに、夜7時15分から10時半まで、多くの生徒が「学習室」の個別ブースで勉強する。ここには毎日、交替で教員を配置しているほか、夜間指導専門の外部講師もおり、遅れ気味の生徒には、補習などを行っている。また、生徒は分からないところが出てきたらすぐに質問ができる。

「これらの活動では、必ずレポートを作成させますが、一生懸命取り組んでいることが分かる記述になっています。アンケートによると、生徒の満足度も高くて高く、『医師にはどのような力が必要になるのか分かった。今から意識して身につけるようにしたい』といった声も聞かれます。未来に夢を抱き、成長しようとする生徒たちの姿を頼もしく感じています」（新井校長）。

放課後の補習や夜間の特別指導も充実

もちろん、知識の習得もおろそかにはしていません。

こうした特色ある教育によって、生徒たちは最後まで医師志望を貫いていく。川崎医科大学の特別推薦入試も大きな魅力だ。結果として、開校以来の卒業生1689人のうち、実に90・4%に当たる1527人が川崎医科大学に合格している。驚異的な実績といえよう。しかも、出身地域が多様なことから、医師になった後は全国各地で活躍している。その人脈ネットワークは、将来、大きな財産になるに違いない。

卒業生からのメッセージ

少人数制のアットホームな雰囲気のもとで 医師として大切な人間関係の築き方が身についた

川崎医科大学附属病院 救急科 医師 山田 祥子さん

医師である父の強い勧めで、川崎医科大学附属高校に入学した頃は、「医師になりたい」という強い思いはありませんでした。それでも3年間頑張って、医学部に合格できたのは、アットホームで居心地の良い環境だったからだと思っています。

先生方は生徒のちょっとした変化を見逃さず、声をかけてくれます。成績が伸び悩んでいたときは、放課後、マンツーマンで教えてくださいました。どの生徒も絶対に見捨てられることなく、できるようになるまで面倒を見てくれます。私のために、熱く指導して下さる姿に感激し、何とか応えたいと、頑張って勉強しようという気持ちが生まれました。

仲間にも恵まれました。「皆で協力して、一緒に医学部に行こう」といった雰囲気があり、自習スペースで、得意な科目・分野を教え合ったことも、なつかしい思い出

です。もちろん、すべての生徒と相性が良いわけではありません。けれども、全寮制で、長い時間を一緒に過ごすのですから、うまく付き合うことが大切になります。お互いの性格、個性を尊重して、距離感を図ることが得意になった気がします。いま振り返ると、それは医師になる上でも貴重な経験だったと感じます。医師には、苦手な患者を作らず、常に良好な人間関係を築く力が要求されます。私は、どんなタイプの患者さんでも受容できる方なのですが、その感覚は高校時代に培われたものだと思います。

医師をめざすモチベーションを高める授業が豊富なことも、大きな特色です。「テーマスタディ」では、私たちのグループは、テレビドラマで興味を持った法医学をテーマに選び、さまざまな資料を調べて発表しました。卒業生の講話では、医師としての心構えを学びました。そうした学びを通して、少しずつ医師の仕事の魅力がイメージできるようになりました。



現在は、川崎医科大学附属病院で救急科の医師を務めています。主な業務は、救急外来、救急一般病棟の管理、集中治療室、およびフライトドクターです。フライトドクターとは、119番入電の際に、医師との接触を急いの方がいいと、消防が判断した場合に、ドクターヘリに同乗して、現場に出動する医師のことです。私は月約10日担当しており、多いときは1日に5〜6件出動することもあります。フライトドクターは、幅広い目配りやきめ細かな配慮が求められる、やりがいのある業務であり、誇りを抱えています。圧倒的に男性医師が多いのですが、今後は、女性医師が増えるように、後進の育成にも力を入れていきたいと考えています。

